

アイヌ語静内方言の接続助詞

奥 田 統 己

目次 はじめに

1. 資料および分析方法
2. 先行研究
3. 接続助詞の統語論上の特徴
4. 個々の接続助詞の意味記述

おわりに

参考文献

キーワード：アイヌ語、接続助詞、従属節

はじめに

本稿では、アイヌ語静内方言の文法研究の一として接続助詞を取り上げ、その統語論上の特徴および個々の語の意味について考察する。本稿が資料を得ている話者の方言については REFSING(1986)が音韻論から統語論に至るまでの詳細な記述をすでにまとめている。しかしその記述の細部にはまだかなり修正・補足が必要であり、本稿はそうした試みの一つである。またアイヌ語の個々の接続助詞の意味記述は静内のほかにもいくつかの方言について行われているが、接続助詞全体の統語論的特徴の分析にはなお考察を進める余地が残っている。

1. 資料および分析方法

1.1. 本稿が資料とするのは、北海道日高地方中部の静内町に在住した織田ステノさんが語った、口頭文芸を中心とする延べ約11万語のテキストである。これらのテキストはいずれも、静内町教育委員会があるいは同委員会の委託を受けた筆者が採録したもので、筆者が録音からの文字化を行った。その大半は静内町教育委員会(編)(1991-1995)として対訳のうえ公刊されている。

1.2. まず本稿の持つ方法上の限界を確認しておく。

本稿にまとめている分析を筆者が本格的に始めたのは話者が死亡したあとであり、鍵となる例文のテストや資料中の例外的な用例の詳細な解釈・評価などは十分に行っていない。そのため基本的には本稿での意味記述はテキスト中の用例から導かれる支配的な用法の指摘にとどまっている。そこで記述の信頼性についての情報を補うためそれぞれに用例の概数を付記した。

また1.1.に述べたとおり本稿の資料は英雄叙事詩などの口頭文芸を中心としており、会話的な資料をほとんど含んでいない。したがって本稿の分析は資料の文体的な特徴を反映している可能性がある。

1.3. 以下の本稿では接続助詞の前に置かれる文を前文、後に置かれる文を後文とし、前文の内容を前件、後文の内容を後件とする。また引用中などでS1、S2、E1、E2とあるのはそれぞれ前文、後文、前文の表す事象、後文の表す事象を表している。

1.4. 古原(1991、1992)の記述によれば、織田さんは1901年に静内町東部海岸の字元静内で出生し、15歳ごろに両親をなくして静内川上流の字農屋にあった母の実家に引き取られ、以後1993年になくなるまで静内川上流地域で生活した。こうした彼女の生活体験地の変化は、そのアイヌ語の方言的な位置づけを考えるうえで重要な意味を持つ。なぜなら、これまでの研究によればアイヌ語を北海道西南部と東北部とに分ける大きな方言境界線が静内の付近を走っているとされるからである。筆者の観察では織田さんのアイヌ語は、現在得られる資料から推測される静内川上流の他の話者の方言に比べて、いくつかの点でより北海道東部的な特徴を持っている。静内周辺のアイヌ語の資料はあまり多くないのだが、この地方全体のアイヌ語を把握するためには、織田さんの言葉とその他の話者の言葉とを突き合せて行く作業が今後必要であると考ええる。

2. 先行研究

はじめに述べたとおり、織田さんのアイヌ語についてはすでにREFSING(1986)が接続助詞を含めた記述を発表している。また他の方言を含めたアイヌ語の接続助詞については知里真志保(北海道・樺太全般)田村すず子(主に沙流方言)浅井亨(石狩方言)らの研究者による分析が示されている。ここではまず接続助詞の統語論的特徴についての先行研究を概観し、個々の語の意味記述については4章でのそれぞれの記述のなかで随時参照する。

2.1. アイヌ語に接続助詞という品詞を設定してその機能や品詞分類の基準についてはじめて整理したのは知里(1942、p.570ff.)である。そこでは「第三種の助詞(接続助詞)」としてその特徴を「(イ)用詞(奥田注：動詞)に付く(ロ)「用詞＋第一種助詞(奥田注：いわゆる助動詞など)から成る連語に付く(ハ)「必ず次へ続いて行く性質を有し、節と節とを接続する」とまとめている。知里(1953)の記述も基本的に同じである。

田村(1960:70)はアイヌ語の助詞全体の働きをまとめたうえで「接続助詞とは 動詞的形式+□=副詞的形式 の□の位置にはいることのできるもの」だとし、また田村(1972:148)は「文と文を接続して一つの文にする職能を持つ一群の形式」のうち「もっぱら動詞句に終わる文の末尾について、構文法上の統合関係が切れないもの」を接続助詞と呼ぶとしている。REFSING(1986, p.238)のconjunctualizer(接続助詞)についての規定も基本的には田村(1960)と同じだといえる。ただしREFSING(1986, p.268)の記述は接続助詞の受ける文が終助詞を伴うことを無制限に認めているように解釈できる。

浅井(1969, p.789ff.)は接続助詞を「動詞的形式、あるいはそれに類する形式につく助詞で、主部になり得ないような語結合をつくるもののうち、そこで文が終りえない助詞」とし、田村(1988)らによる名詞化助詞の一部を含んだ品詞として設定している。

2.2. 田村(1972:148)は接続助詞のほかに「直前で構文法上の統合関係が切れ得るもの」つまり自立性を有するものとして接続詞という品詞を設定している。ただし田村(1988, p.53)は「自立語としての 接続詞と、 助詞としての 接続助詞との 間に 明確な 境界は ない」とも述べている。REFSING(1986, p.128)もconjunction(接続詞)という項目を立ててはいるが、アイヌ語には純粹の接続詞はないとしている。

これに対し知里(1942, p.537)は、田村(1972:163)が接続詞としているorowaなどについて「本稿では助詞として扱ふ」としている。浅井(1969, p.786)は助詞のなかには自立語的なものもあるとしたうえで、接続詞という品詞は設定していない。

2.3. 接続助詞の品詞分類をめぐる従来問題になってきたことの一つは、一部の終助詞特に「その事柄について相手の注意をよびおこし、その結果、何らかの行動を相手が行うことを要求する」(田村, 1988, p.61)na「～ぞ」との区別である。

知里(1942, p.567)が示している終助詞の特徴のうち接続助詞と異なっているのは「(ハ)文を必ずそこで終止する」だけであり、(イ)(ロ)は同じである。ところがその「文の終止」は、田村(1988, p.61)が終助詞の項でnaをとりあげて「文(命令文その他)が続くこともあり、続かないこともある。続く場合には、naで終わる文の最後に、文末の音調がなく、次の、要求を表わす文がすぐに続いて、全体が一つの文音調を持つことが多い。その場合、naは接続助詞として働く」と述べているように必ずしも明白な基準となりうるわけではない。

そして田村(1973a:35)は「naは終助詞と 接続助詞の 両方に またがる存在」としている。REFSING(1986)もnaを終助詞の項(p.234)と接続助詞の項(p.253)の両方で取り上げている。そして接続助詞の項で、命令や要求を表す文が後続するときは接続助詞として、後続する命令が明示されないときには終助詞として働くとの説明がある。

2.4. 接続助詞の下位分類については知里(1942, 1953)は何も明示的に述べていない。田村(1988、

p.53ff.)はi)時間的な前後関係や同時関係の表現ii)目的や原因の表現iii)条件の表現iv)逆接や譲歩の表現v)方法の連用句を作る・推量や様態を表わす連用句を作るvi)意外あるいは異常だという話し手の気持ちを表す、という細目分けをして記述している。またREFSING(1986, p.239)は意味論上の基準から接続助詞は1.等位、2.継起、3.同時、4.結果、5.譲歩、6.条件、7.逆接の7つに下位分類できるとしている。しかしいずれも、それらの相互関係については明示的な指摘を行っていない。また浅井(1969, p.789ff.)は接続助詞を「イ連用修飾形式をつくるもの」(田村(1988)の接続助詞)と「ロそれがついた形式が、客語のような職能を示すもの」(田村(1988)の名詞化助詞の一部)とに分けている。

3. 接続助詞の統語論上の特徴

3.1. 本稿では接続助詞を、動詞句に終わる文または動詞句そのものに後続して、副詞節または副詞句を形成する付属語として定義する。これは実質的には上に述べた田村(1960)の定義と同じである。4.1.1.で述べる例外的な場合を除き、終助詞のあとに接続助詞が続くことはない。

3.2. 本稿では接続詞という品詞を設定しない。従来接続詞とされてきた表現はこの方言では接続助詞としてまたは以下のように分析できる表現として位置づけることができる。

アイヌ語には、人称を表す接辞(人称接辞)を伴い、単独でまたは名詞に後続して副詞句を形成する(例文1)、田村によって後置副詞と名づけられた一群の自立語がある。これらのうちの一部は例文2のように文を受けて副詞節を作ることがある。REFSING(1986, p.129)が接続詞として示しているekari「～とちょうど同時に」はその一つである。

- (1) hosippa=an konno "mici ne manu p suy kamuy yuk ukose wa ek" ari
帰る(私が) ~すると 父 さん また 熊 鹿 とともに運ぶ ~して 来る と
hawkici kane i=ekari i=ekantusmak
言う ~しながら (私を)と同時に (私を)迎えに出る
「私が帰ると『父さんがまた熊と鹿をいっしょに運んできた』と言いながらちょうど私を出迎えた」

- (2) taa inkar=an ekari okay sante kaykosanke
こうして 見る(私が) ~したときちょうど 男 子供 一人で産んだ
「こうして私が見たときちょうど(彼女が)男の子を一人で産んだ」

位置関係を表す名詞(位置名詞)に場所の格助詞が後続して、日本語の「～するなかで」のような表現と同じように接続助詞的に働くこともある。田村(1972:160ff.)が接続詞としているorowa「それから」、REFSING(1986, p.128)によるetokta「その前に」などがそれにあたる。しかし本

稿の扱った方言ではそれらはoro wa「そのとき・～から」etok ta「前・～に」などという位置名詞の用法の一部として分析できる。また例文3のように名詞化助詞や位置名詞によって名詞化された文がそのまま副詞節になることもあり、その場合の名詞化助詞なども接続助詞と同様に働いている。

- (3) i=kosukup mat ka cis kane an pe "itekke cis yan
 (私を)許嫁とする 女 も なく ～しながら いる もの 禁止 泣く ～しなさい
 siknu=an wa tusa=an wa arki=an ruwe ne na" ari an
 生きる(私が) ～して 回復する(私が) ～して 来る(私が) ようす だ ぞ と ある
 pe a=ye
 もの (私が)言う
 「私の許嫁も泣いているのを、『泣くな、私は生きて回復して戻ったのだよ』と私は言った」

本稿では、意味の似かよった接続助詞の記述と対比する必要がある場合にこれらの表現の意味も記述した。ただしそれぞれについての詳細な記述は別稿に譲ることとする。

3.3. 終助詞と接続助詞との区別は、次の2つの観点から明確に行うことが可能だと考える。その一つは副助詞が後続することができるか、もう一つは名詞を修飾する節のなかの従属節などを作ることができるかどうかである。接続助詞ではこれらの少なくとも一つが可能であるのに対し、終助詞ではいずれも不可能である。なおこれらはいずれも文+接続助詞が副詞的形式であることによる性質であり、その意味では従来の記述が含意していたことである。

ここで問題となるnaと理由の接続助詞のkusuとをこの2つの基準に照してみる。まずkusuには副助詞が後続する例がみられるが、naに副助詞が後続した例は見いだされない。またkusuは連体修飾節の内部に埋め込まれた文を作ることができるが、naにはそうした例はない。つまりnaはあくまで終助詞であり接続助詞ではないと考える。

3.4. アイヌ語ではアスペクトやモダリティーなどについての情報が接続助詞の意味のなかに含まれていることがある。したがって、南(1974)や益岡(1993)が日本語について述べているような接続助詞の下位分類がアイヌ語においても可能であると考えられる。本稿では南(1974, p.114ff.)の日本語についての分析を参考にしながら、前文が他の従属節などをどこまで内部に含むことができるか、どれだけ具体的な内容を示せるか、アスペクトやモダリティーの要素をどこまで含み得るか、といった観点からおおまかに階層化することを試みた。ただし1.2.に述べたような方法上の限界から分析はなお予備的な段階にとどまっている。

以下4章での記述は基本的にその階層の順序に従っている。そのうち4.1.の時間関係を表すものの分布は比較的自由であり、それらが作った節が4.3.から4.7.で取り上げている接続助詞の前文の内部の従属節になることも、逆に前文が4.2.から4.7.で述べた接続助詞による従属節などを

含むこともある。また前文の内容は抽象的なことも具体的なこともあり、モダリティーを表す形式を含むこともできる。

4.2.に取り上げるグループはもっとも前文の構造が単純でしばしば主語を伴わない動詞句であり、内容も抽象的で、アスペクトやモダリティーの要素を持たない。また他の接続助詞などによる従属節を含むこともない。4.3.から4.5.までのグループの相互の順序は比較的自由であると考えられるが、なお検討を要する。これらの表現での前件は4.2.のグループに比べてより具体的で、アスペクトの要素などを持つことができ、前文は4.1.から4.5.までの接続助詞による従属節などを含み得る。4.6.のグループの作る節は4.1.から4.5.までのグループによって形成された従属節などをその内部に含むことができるが、逆に4.2.から4.5.の接続助詞の前文の内部の従属節となることはできない。そして最後の4.7.に属するkorkaは、4.1.から4.6.までの接続助詞による従属節などを前文の内部に含むことはできるが、4.1.で述べたものを除き、その逆はできない。4.6.と4.7.のグループの前件はいずれも具体的で、さまざまなアスペクト・モダリティーを持つことができる。

4. 個々の接続助詞の意味記述

4.1. 主に前件と後件との時間関係を表すもの

4.1.1. wa 「～して」

もっとも意味の広い接続助詞であり、必ずしも時間関係だけを表すわけではない。用法はア. 4.1.2.のhineと同じく前件の次に後件が起ることを表すもの(例文4)イ. 4.2.2.のnoのように前件の状態や方法で後件が起ることを表すもの(例文5)ウ. 4.6.1.のkusuのように前件が後件の理由を表すもの(例文6)エ. 後文に「いる、見る、聞く、置く」などの動詞が現れ「～している、～してみる、～しておく」などの慣用的な表現を作るもの(例文7)に大別される。用例はあわせて4000以上得られている。

REFSING(1986, p.239ff.)は時間的継起関係(本稿のア)、2つの行為などの列挙、前件が後件の実現する状況となる、主語や目的語の性質を強調して規定する(Sino nispa an=ne wa ほんとうの・紳士・私が・である・～して「私はほんとうの紳士であって」などの表現をとる)、人数を表す(以上本稿のイ)、分析的な助動詞となる(本稿のエ)などの働きがあるとしている。

そして分析的な助動詞の一つとして後文に「いる(ある)」という意味の動詞anまたはokaが現れて前文+wa anなどとなる表現をあげ、前件が話者の時間的枠組みと等しいかそれ以上の広がりを持つ過程であることを表すとしている。しかし本稿の資料中では例文7のように前件がすでに完了している事態である場合も多くみられる。したがってこうした表現は、中川(1982a:97)が沙流方言のwaについて述べているのと同じように、前件の結果が継続していることを表すと分析すべきである。4.1.5.参照。

- (4) hopunpa=an *wa* ipe=an *wa* nani ekimne=an
 起きる(私が) ~して 食事する(私が) ~して それからすぐ 山猟をしに行く(私が)
 「私は起きて食事をしてそれからすぐ山猟をしに行った」
- (5) kamuy utar nucaktek *wa* usa rimse usa tapkar ki
 神 たち 喜ぶ ~して いろいろな 踊り いろいろな 踏舞 ~をする
 「神々は喜んでいろいろな踊りや踏舞をした」
- (6) munkutaus ta i=ociwe *wa* poo a=kor ona esiante
 ごみため に (私を)捨てる ~して いっそう (私が)持つ 父 ~に腹を立てる
 「(悪者が)私をごみために捨てたので、いっそう私の父は腹を立てた」
- (7) e=kor turesi e=kosukup mat cise or ta hosippa *wa* oka
 (お前が)持つ 妹 (お前が)許嫁とする 女 家 ところ に 戻る ~して いる
 「お前の妹とお前の許嫁とは、家に戻っている」

3.1.で述べたとおり、一般にアイヌ語の接続助詞は終助詞に後続することはない。しかしこの方言では例文8にみるように、2つ以上の命令・勧誘などの文を*wa*が接続するとき命令の終助詞 *yan*のあとに*wa*が後続することがある。これに対し、主に沙流方言を対象にしていると考えられる田村(1988、p.61)の記述では「2つ以上の動詞句が接続助詞*wa*『~して』で結ばれている場合でも、*yan*は文末の動詞句にのみつく」とされており、こうした現象はないことになる。

- (8) tekturiri *yan* *wa* poronno ipe *yan*
 手を伸ばす ~しなさい ~して たくさん 食事する ~しなさい
 「手を伸ばしてたくさん食べなさい」

4.1.2. *hine* 「~してそして」

ア. 前件がまず起り、次いで後件が起ることを表す。イ. 例は比較的少ないが、前件の状態で後件が実現することを表す。用例をあわせて1000以上みられる。

RESFING(1986、p.242)は*hine*の意味を*wa*に近いとし、事態を列挙する働きを持っていて、時には時間的継起関係を含意しあるいは後文の実現する状況を前文が提示していることを含意すると説明している。この記述は確かにそのとおりだが、*wa*と比較すればこの方言の*hine*の用法では時間的継起関係の指示がより支配的だとみることができる。

- (9) a=kor okkaypo utar suke *hine* ipe=an *hine*
 (私が)持つ 若い男 たち 炊事する ~してそして 食事する(私達が) ~してそして
 hotke=an
 寝る(私達が)
 「私の(仲間の)若者たちが炊事をしてそして私達は食事をしてそして寝た」

「～してから」という意味を表すのには「ところ」を意味する位置名詞のorまたはoroに「～から」という場所の格助詞のwaまたはwanoが後続したor wa、oro wa、or wano、oro wanoという表現も用いられる。また「～から（時間的に）ずっと」という意味の後置副詞unno, ounnoが接続助詞的に用いられる場合には、前件が起った時点から後件が一定の期間継続してまたは繰り返して起っていることを表す。

中川(1982b, p.99)は静内方言について「S1 orowa(no) S2は、単にE1とE2がその順で起きることを示すのに過ぎないのに対し、S1 (o)unno S2では、E1が何らかの契機となって、E2が起きることを表すと見られる」と述べている。しかしやはり「契機」を表すといえるkonnoなどと比べると、unno、ounnoでは後件が継続または多回である用例が支配的である。

4.1.3. tek 「～してそして」

hineのアの用法と同じく前件が起ってから後件が起ることを表す。ただしhineよりも前件と後件との時間関係を強調し「前件したとたんに後件」のような意味を表わしたり(例文10)、その時間関係が意外であることを表わしたり(例文11)する。また例文12のように前文に疑問詞が置かれ「前件してから後件」の事態全体を話し手が疑問に感じていることを強調する例も多く、100近い全用例のうち60以上を占めている。

REFSING(1986, p.246)は純粹に時間的前後関係を表して因果関係を示さないとし、またこの方言ではまれにしか用いられないとしている。田村(1988, p.53)は2つの事象の時間的継起関係を表わす場合に北海道東部ではtekが用いられるとしている。しかしこの方言で時間的継起関係を主に表わす接続助詞として一般的なのはhineだと筆者は考える。また他の接続助詞に比べて特に用例が少ないわけではない。

- (10) "e=kor yupo e=kor ona e=kor totto taan ta an=se wa a=tuye
 (お前が)持つ 兄 父 母 そこ に (受身)運ぶ ～して (受身)切る
 ruwe ne haw'an" patek an=nu tek suy a=koyaynuturaynu
 ようす だ のだった それだけ (私が)聞く ～してそして また (私が)我を見失う
 「『あなたの兄さん父さん母さんはそこに連れられて殺された
 のでした。』とだけ私は聞いたとたんにまた我を忘れ(て怒っ)た」

- (11) onne=an tek pokor=an ruwe ne
 年を取る(私が) ～してそして 子供を持つ(私が) ようす だ
 「私は年を取ってから子供ができたのだ」

- (12) rupne utar nekon iki tek yayresu=an
 大きい 人たち どう 行動する ～してそして 自分を育てる(私が)
 「大人たちはどうなってしまっって私は一人で育てているのか」

4.1.4. *pateknetek* 「～するやいなや」

*tek*の例文10の用法と同じく、前件が起った直後に後件が起ったことを表す。用例は10例みられる。

- (13) *a=kor unarpe hemkawoy ari hawki pateknetek hawehe ka isam*
 (私が)持つ おばさん たいへんだ と 言う ～するやいなや 声 も ない
 「私の小母さんが『たいへんだ』と言うやいなや声もしなくなった」

4.1.5. *kane* 「～しながら」

後件が継続してあるいは繰り返して起きているあいだじゅう前件が継続していることを表す(例文14)。用例は全部で2700ほどみられる。

REFSING(1986, p.250)によれば、*kane*は2つの動作や事態が同時に実現することを表し、また状態動詞のあとでは後件の背景となる状況を前文が表すとしている。また後文が「いる」という意味の*wa*または*oka*のときには分析的な助動詞として話者の時間的枠組みと同時に起る過程を表すと述べている(p.195)。しかし4.1.1.で述べた*wa an*などの表現と比較すると、*kane an*などの表現(例文15)は前件が進行しつつある過程あるいは習慣的に実現する状態を表すと分析すべきである。なおこの分析は中川(1982a:97)が沙流方言の*kor an*について述べていることと共通している。

- (14) *tane onne=an inukuri=an kane an=e=resu ruwe*
 今もう 年を取る(私達が) 体が不自由だ(私達が) ～しながら (私達が・お前を)育てる ようす
ne na
 だ よ
 「今や私たちは年を取り体が不自由でありながらお前を育てたのだよ」
- (15) *kes to an kor ikarkar=an kane oka=an*
 毎日 刺繡をする(私が) ～しながら ある(私が)
 「毎日私は刺繡をしていた」

4.1.6. *rapok, rapoki, rapokke, rapokike* 「～しているあいだに」

前件が継続しているあいだに後件が起ったことを表す。*kane*が後件の内部での前件の継続のみを表すのに対し、これらは前件の起っている時間帯が後件の起っている時間帯を外側から含んでいることを表す。用例はあわせて約30得られている。

この4語はもともと「～の下」という意味の位置関係を表す名詞(位置名詞)であり、ここで取上げた表現は、3.2.で指摘したような名詞化された文がそのまま副詞節として働く場合の一つとすべきである。そして位置名詞としてのこれらのかたちに場所格の助詞*ta*が後続してもやはり「～しているあいだに」という表現ができる。しかし知里(1942, p.537)が方言を特定せずに*rapok*

について述べていることと同じように、この方言でもこれらはtaを伴わずに文を接続することが多く、また位置名詞としての本来の用法はほとんどみられない。このことから本稿では特に項目を起こして記述した。なおREFSING(1986, p.130)は「～しているあいだに」という意味の接続詞としてrapoketaを示している。

- (16) a=kor okkaypo utar suke rapokke
 (私が)持つ 若い男 たち 炊事する ～しているあいだに
 inawneni rorunpuyar kari a=ahupte
 木幣の材料の木 上座の窓 ～をとおして (私が)内に入れる
 「私の(仲間の)若い男たちが炊事をしているあいだに
 私は木幣(祭具の一種)の材料の木を上座の窓をとおして家のなかに入れた」

そのほかこの方言では「～とは別に」という意味の後置副詞mosmaが接続助詞的に用いられて、rapokなどと同じく前件が継続しているあいだに後件が起ったことを表す。後置副詞の意味からみてrapokなどよりも前件と後件とがお互いに独立していることを強調すると考えられるが、用例が少ないため断言はできない。

4.1.7. ayne 「～したあげくに」

前件がしばらく継続しそのあとで後件が起ったことを表す。この記述はREFSING(1986, p. 247)と基本的に同じである。日本語では「～したあげくに」と訳せることが多いが、例文18のようになんか訳しづらい場合もあり、必ずしも前件の完了を意味しない。用例は350弱である。

- (17) cis=an ayne an=hawe kicitce
 泣く(私が) ～したあげくに (私の)声 キイキイ言う
 「私は泣いたあげくに声が枯れた」
- (18) a=kor yupo hese ayne a=kosirepa kuni
 (私が)持つ 兄 息をする ～しているうちに (私が)着く ように
 kamuy ne manu p inkar ki yan
 神 だ という もの 見る こと する ～してください
 「兄さんの息のあるうちに私が着けるように、神様お見守りください」

4.1.8. koekari 「～したときちょうど」

前件が起るのと同時に後件が起ることを表す。また「～とちょうど同時に」という意味の後置副詞ekariとekarinenayとが接続助詞的に用いられることもある。いずれも用例は少なくkoekariは2例、ekariは5例、ekarinenayは1例しか資料中では得られていない。

- (19) cise soy ta paye=an koekari wenkamuy utar cise or ta uawokuta
 家 外 に 行く(私が) ~すると同時に 悪者 たち 家 ところ に 乱入する
 「私が家の外に行くと同時に悪者たちは家に飛び込んだ」

4.1.9. ranke 「何度も～しては」

前件が繰り返し実現し、そのたびに後件が実現することを表す。用例は50弱みられる。「～回」という意味の名詞suyに後続して「～回ずつ」という表現を作ることもあるが、生産的な後置副詞とは認められない。沙流方言にみられる助動詞的用法（田村、1988）はこの方言にはない。

REFSING(1986, p.245)は何事かが何回も実現することまたは2つ以上の動作が交互に行われることを表すとしているが、前件と後件との関係については触れていない。

- (20) pisakku sik no sake an=nise ranke ear tas ne an=ku wa isam
 柄杓 一杯 に 酒 (私が)すくう ~しては 1 息 ~として (私が)飲む ~して しまう
 「私は柄杓いっぱい酒をすくっては一息に飲み干してしまった」

4.2. 前件が後件の目的や内容を規定することを表すもの

4.2.1. kusu, kus 「～するために」

未実現のまたは一般的な事態である前件が後件の目的であることを表す。kusはkusuの末尾の母音が無声化したものとも考えられるが、現時点では別の語形として解釈する。

本稿ではこれらの語の用法を大きく2つに分け、4.2.1.では目的の用法について、また4.6.1.では「～するから」という理由・原因の用法について記述した。理由・原因の用法に対してここで述べる目的の用法は、前文が接続助詞による副詞節を伴った複文にならないこと、また前文がしばしば人称接辞や主語を伴わない動詞句であることの2点から、形式的にも異なる特徴を持つ。目的の用法のkusuとkusは本稿の資料中に200以上みられる。

REFSING(1986, p.251)はkusuをこれら2つの働きを持つ接続助詞として一つのセクションで記述している。

- (21) ratcitara irara sak no irawketupa kus payeka yak pirka
 ゆっくりと 悪さ ない ~して 仕事する ~するために 歩き回る ~したら よい
 「ゆっくりと悪さをせずに、仕事をするため歩き回りなさい」

なおkusuなどは名詞句に後続して「～の目的で」という意味や、4.6.1.で述べる用法に相当する「～が原因・理由で」という意味を表すこともあり、100以上の例が存在する。また接続助詞waの後文の文頭に立って前文が後文の原因・理由であることを表す例も20以上みられ(4.6.1.参照)、さらに用例は多くないものの例文22のように独立して用いられることもある。こうしたことからこれらの語は後置副詞に分類すべきだと考えるが、便宜的に本稿でも項目を起して記述した。ま

た「～のためだけ、もっばら～したおかげで」という意味の後置副詞である *kuskeray* と *kuskeraypo* も接続助詞的に働くことがあり、やはり目的や原因の意味を表す。なお田村(1988, p.56)は *kusu* を名詞句の後にもつくとしているが、REFSING(1986)にはそうした指摘はない。

- (22) *anun neyakka apa neyakka ahup wa apekur yan*
 他人 であっても 親戚 であっても 内に入る ～して 火にあたる ～しなさい
kus eci=payeka p an=nu na
 ～のために (お前達が) 歩き回る もの (私が) 聞く ぞ
 「他人であっても親戚であっても家に入って火にあたりなさい。歩き回っているわけを聞きますよ」

4.2.2. *no* 「～する状態で」

前件は一般的な状態・方法などであり、後件がそうした状態などで実現することを表す(例文23)。また前文が個別的な状況を表したり複文であったりしても、前文が否定・禁止などの表現の場合には4.1.1.の*wa*の代りに用いられることが多い(例文24)。

REFSING(1986, p.241)は前件が後件の実現する状況を表し、おおむね否定表現や状態動詞に後続するとしている。しかし例文にみるように、前件に求められるのは動詞の性質よりもむしろ事態そのものの一般性である。

- (23) *kamuy unarpe kor wa okay pe an=eramuan no oka ruwe ne na*
 神 おばさん 持つ ～して いる もの (人が) わかる ～する状態である ようす だよ
rura yan
 運ぶ ～してください
 「神のおばさんの持っていたものはわかるように置いてあるのだよ、運びなさい」

- (24) *itekke heyasi eci=yap no cip samake ta eci=oka nankor*
 禁止 陸のほうへ (お前達が) 上陸する ～して 舟 そば に (お前達) いる だろう
 「陸に上がらずに舟のそばにいるようにしなさい」

4.3. 後件が前件についてのなんらかの判断の根拠であることを表すもの

4.3.1. *kotom*, *kotomka* 「～するらしく、～しそうに」

kotom の用例は50以上あり、前件がすでに実現していることまたはこれから実現しうるもののどちらかであることが、後件から推定されることを示す。例文25は前件が既実現、例文26は前件が未実現の例である。これに対して*kotomka*は用例が3しかなく、いずれも前件が既実現の例である。用例が少ないため、前件が未実現の場合に*kotomka*が用いられるかどうかは明らかでない。

4.3.で取り上げたグループでは、例文26のように後文に「話し手が思う(*yaynu*, *iramu*)見る(*inkar*)聞く(*inu*)」ことを示す自動詞＋人称接辞か、または「ようすである」ことを示す人称接辞を取らない動詞(*sirki*, *sir'an*)が現れることも多い。その場合、*kotom*を用いた表現は「～するら

しく思える」「～しそうに見える」「～するらしいようすである」と日本語訳することができ、後件の具体的な内容は示されない。

REFSING(1986,p.262)はkotomと4.3.4.で述べるpokonについて、前件が話者に見えていることであるが必ずしも実際に起きていることではないことを示すとしているが、後件との関係については述べていない。またkotomとpokonをいずれも名詞化助詞として記述している。しかし本稿の資料中では動詞の目的語などになっている確実な例はなく、接続助詞として分析すべきだと考える。

- (25) wen onne p, kor matkaci momka wa isam kotom
 悪い 年を取った もの 持つ 女の子 流す して しまう らしく
 iwor epitta payeka=an yakka nep ka isam
 山 じゅうを 歩き回る しても 何 も ない
 「悪い年寄りが自分の娘を（川に）流してしまったらしく、山全体を我々が歩き回っても何もいない」

- (26) sirpeker paye=an yakanak an=i=tuye kotom iramu=an
 昼 行く(私が) ならば (受身・私を)斬る そうに 思える(私が)
 「昼(襲いに)行ったら私が斬られそうに思える」

4.3.2. noyne 「～するらしく」

前件がすでに実現していることが後件から推定されることを示す。kotom/kotomkaとは異なり、前件が未実現の用例はない。なお資料中には用例が9しかなく、この方言ではnoyneのかわりにkotomを用いることが多いと考えられる。

- (27) aynu nispa utar yuptek siri nep cahaw ka isam noyne uterkere siri a=nukar
 人間 紳士 たち 勤勉だ ようす 何 悪い噂 も ない らしく 走り回る ようす (私が) 見る
 「人間の紳士たちが勤勉なようす、何の悪い噂もないらしく走り回っているようすを私は見た」

4.3.3. anke 「今にも～してしまいそうに」

前件が発話の時点では実現していないが、容易に実現しそうなことが後件から推定されること、しかも前件が話し手にとって望ましくないことであること、を表す。確認している9例では後文はいずれも「話し手が思う(yaynu)ようすである(sirki)」などである。

- (28) tane an=i=eyapkir anke sirki
 今もう (受身・私を)投げる ～てしまいそうに ようすである
 「今やもう私は投げ飛ばされそうなようすだ」

4.3.4. pokon、pokonka 「～するみたいに」

前件が実現していないにも関わらず、後件からまるで実現しているかのように推測されることを示す。pokonの例は40以上、pokonkaは数例みられ、そこからは両者の違いは見いだせない。

REFSING(1986, p.262)はpokonについて4.3.1.で引用した記述に加えて、事態の外見が動作者によってそう装われたものであることをしばしば表すとしている。しかし例文にみるようにpokonが表す非現実性が動作者の意図と関わりないことも多い。

- (29) nen ka an=teke kisma wa yuk an=ri pokonka irieaskay=an”
 誰 も (私の)手 握む して 鹿 (私が)皮剥ぎをする みたいに 皮剥ぎが上手だ(私が)
 「誰かが私の手を握んで鹿の皮剥ぎをしているみたいに上手に皮剥ぎができた」

なかには、後件そのものが前件と類似していることを表している用例も数例みられる。例文30では「家が風で転がった」ことが「フキの葉が転がる」ことについての判断の根拠になっているのではない。その点でこの用法は4.3.で述べている他の接続助詞の用法とは異なっている。また「～と同じように」という意味の後置副詞koraciも、この用法のpokonと同様に2つの文を接続して後件が前件と表面的に類似しているものであることを表すことがある。

- (30) as ohonruy cise anak korham turse pokon ukotutturse
 立つ 長時間だ 家 は フキの葉 転がる ～するみたいに みな転がる
 「(風が吹いて)建って長くたった家はフキの葉が転がるみたいにみな転がった」

4.4. 前件が後件の実現のための何らかの条件であることを表すもの

4.4.1. yakun, yak'un 「～したら」

前件はまだ実現していないかまたは習慣的なことがらであり、それが実現したときには後件が実現することを表す。また後件が命令などで、前件が実現したら後件を聞き手に求める表現でも用いられる。以下のyakやyakanakなどと異なり、前件についての話し手の判断を伴わない。資料中には300例以上現れるが、強調して発音するとき以外では多くyakunというかたちになる。

田村(1988, p.41)はyakunを含むいくつかの接続助詞を自立性の強いものとして接続詞の項でも取り上げている。またREFSING(1986, p.130)は次節で述べるyakを接続助詞と接続詞の両方の項目で記述している。これに対し本稿の資料中ではyakunが文頭に立っていると解釈できる例が2例だけ得られているが、yakun, yakともに特に自立性が高いとは認められない。ただしこの分析は、本稿の主な資料が自立語・付属語の区別の比較的明確な口頭文芸テキストであることを反映している可能性もある。REFSING(1986, p.256)の意味記述は本稿の分析と矛盾しない。

- (31) an=i=ronno yakun hosippa=an ka somo ki siknu=an yakun
 (受身・私を)殺す ～したら 帰る(私が) も 否定 する 生きる(私が) ～したら
 cipo=an wa suy hosippa=an na
 舟に乗る(私が) ～して また 帰る(私が) よ

「私は殺されたら帰ってこない、生き延びたら舟に乗ってまた帰ってくるよ」

4.4.2. yak 「～したら」

前件はまだ実現しておらず、しかもその実現に話し手が聞き手が主体的に関与できるか期待や恐れを感情を抱いていることがらであり、それが実現したときには後件が実現することを表す(例文32)。全部で110例ほどのうち70例近くでは後文が「よい(pirka)」という動詞であり、前件の実現を話し手自身や聞き手に促す表現である(例文33)。また前文に「どのように(nekon)どこへ(enon)」などの疑問詞を含み、話し手がどう行動すれば後件が実現するかを問う疑問表現でも用いられる(例文34)。

田村(1973b, p.72)は沙流方言でのyakunの意味について「望むとか恐れるとかの感情的期待なしに、ただ冷静にE1を前提条件として容認し、その上でE2を考える」とし、それと対比してyakの意味を「《未実現の事象E1が実現した場合に、望ましいかあるいは望ましくない事象E2が生ずる》という予想」だとしている(1973b, p.69)。しかし本稿では4.4.1.～4.4.3.までの助詞の意味の差をもっぱら前件についての話し手の態度の違いによると分析した。

REFSING(1986, p.257)は、前件が実現したときに必ず後件が実現することを表し、しばしば話し手が前件の実現を恐れてその警告として後件を示すことを含意するとしている。しかし実際には例文32のように前件の実現が期待される場合にも用いられる。

- (32) poronno e=ipe yak emkota e=tumkor na
 たくさん (お前が) 食べる ～したら 早く (お前が) 元気づく よ
 「たくさん食べたら早く元気が出るよ」

- (33) sunke p irara p an=ronno a=pakasnu yak pirka
 嘘をつく もの 悪さをする もの (私達が) 殺す (私達が) 懲らしめる ～したら よい
 「嘘つきや悪者は私達が殺して懲らしめればいい」

- (34) enon sikirpa=an yak or ta sik'o=an kotan an ya a=erampetek
 どこへ 向う(私が) ～したら そこ で 生れる(私が) 村 ある か (私が) 知らない
 「どこへ向ったら私の生れた村があるのかわからなかった」

10ほどの用例では後文が「～を(に)言う」という意味の動詞yeに不定の主語を示す人称接辞aまたはanが接頭した文である。この場合は、事実かどうかわからないけれどもそういう話だ、という意味をこめて前文を引用する働きを持つ。

- (35) an=saha ne yak a=ye p kamuy menoko eattukonno
 (私の) 姉 だ と (不定) 言う もの 神 婦人 何とまあ
 a=kohepuni ka koyaykatanu no an kamuy menoko
 (不定) ～のほうに顔を上げる も ～を慎む ～する状態で ある 神 婦人

「私の姉だという人、神のご婦人、そのほうに顔を上げるのも慎まれる神のご婦人」
(3つの名詞句の同格表現。乳児のうちにさらわれた話者が初めて姉と対面している)

4.4.3. *yakanak*, *yakanakne*, *akanak*, *akanakne* 「仮に～したら」

前件は、まだ実現しておらずしかも実現するかどうかが不確実なこと(例文36)、または過去の事実と反していること(例文37)であり、それが実現したときに後件が実現することを表す。*yak*と異なり、後文に「よい」が現れる用法はみられない。また前文が話し手の選択についての疑問詞を含むこともない。したがってREFSING(1986, p.257)が述べているような単なる*yak*の強調ではなく、別の働きを持つ接続助詞だと考えられる。用例はあわせて120ほどである。

- ③6 *e=hacir* *yakanak* *nani e=sumawne ruwe ne*
(お前が)落ちる 仮に～したら すぐ (お前が)死ぬ ようす だ
「お前は落ちたらすぐに死ぬのだよ」

- ③7 *an=i=pirma* *somo ki* *yakanak*
(受身・私に)知らせる 否定 する 仮に～したら
nekon iki=an a ruwe ne ya ka a=erampetek
どのように する(私が) 過去 ようす だ か も (私が)わからない
「(危険を)知らされなかったら私はどうなっていたかもわからない」

4.4.4. *cik*, *ciki* 「～したら」

後文は聞き手に対する命令・勧誘・指示などの表現であり、前文が実現したら後件を聞き手に求めることを表す。*cik*は60例以上、*ciki*は20例ほど得られており、両者の違いは認められない。

REFSING(1986, p.253)の述べている日常会話での*cik*の用法はここでの記述と一致する。しかし、同じ箇所で示されている物語中で因果関係を表す用法および通常の条件表現の用法は、本稿の資料中には見いだせなかった。

- ③8 *kamihi eci=e* *rusuy cik e yan*
その肉を (お前達が)食べる ～したい ～したら 食べる ～しなさい
「その肉をお前たちが食べたいのなら食べなさい」

4.4.5. *konno*, *koonno*, *kor* 「～すると」

前件はすでに実現した過去のことがらか、習慣的にいつも実現していることがらであり、それが実現した状況のなかで後件が実現することを表す。また後件はすでに実現して、前件が実現したときに話者が後件を認識したことも表す。この節と次節とはいわゆる「確定条件」であるが、この節で扱う表現では後文の実現が予期に反しないのに対し、次節のものでは後文の実現が予期できなかったものである点が異なっている。*konno*は900例近く、*koonno*も100例以上みられるが、

korの例は40に満たない。konnoとkoonnoの音韻解釈の整理は今後の課題である。

REFSING(1986, p.249)はkonnoを時間的継起関係の接続助詞に分類している。そして習慣的または一般的な前件のあとに後件が実現することを表すとし、場合によっては条件の意味合いが与えられるとしている。

- (39) ipeokere=an konno a=kor sapo sitcasnuka
 食事を終える(私達が) ~すると (私が)持つ 姉 後片付けをする
 「私たちが食事を終えると姉さんは後片付けをした」

4.4.6. akusu、akus、awa 「～したところ」

前件はすでに実現した過去のことがらであり、それが実現した状況のなかで、それまで予期できなかった後件が実現したことを表す。4.4.5.と同じく、後件がすでに実現して前件が実現したときに話者が後件を認識したことも表す。akusuとakusの例はあわせて350以上、awaの例は250以上あるが、それらのあいだの意味の違いは見いだせなかった。またakusはakusuの末尾母音が無声化したものとも考えられるが、ここでは別語形としておく。資料のなかには同じような文脈で用いられているakorという語形が2つ、akorakという語形が1つみられるが、織田さんから確認を得ることはできなかった。

REFSING(1986, p.248)によればakusも時間的継起の接続助詞であり、前件を背景として、予期されなかった後件が提示されるとしている。awaについての明示的な記述はない。

- (40) inkar=an akus saranip oske a=omare a cep isam
 見る(私が) ~すると 袋 なか (私が)入れる 過去 魚 ない
 「見ると袋のなかに入れておいた魚がなかった」

- (41) upopo=an kane oka=an awa arowaciki iutani ari i=toykokikkik
 歌う(私が) ~しながら いる(私が) ~すると 思いがけず 杵 でもって (私を)ぶっ叩く
 「私が歌っていると思いがけず(女が)私をぶっ叩いた」

4.5. いわゆる譲歩を表すもの

4.5.1. hikeka、hita 「～したのに」

前件は後件とは異なる事態がより実現しやすいように譲歩されたものだが、にも関わらず前件が実現したとき後件が実現したことを表す。次節のyakkaでは前文がすでに実現していても未実現でもよいのに対し、これらでは前文はすでに実現したことがらである。

hikekaは分析すれば《もの》という意味の名詞化助詞hikeに副助詞kaが後続したかたちである。hikeはkaを伴わなくても接続助詞的に働き、後件を述べる前提として前件を提示する。ここでのhikekaの意味はそうしたhikeの意味がより明確に狭まったものだと考えることもできる。こうしたhikekaの用例は60以上みられ、本稿ではhike+kaとは区別して接続助詞とした。

またhitaは分析すれば《とき》の意味の名詞化助詞hiに場所の格助詞taが後続したかたちであり、hi+taの表現は「～したときに」というときに用いられることが多い。しかしここで取り上げた用法は、用例が9例と少ないのだが、そのように解釈することは難しい。この点は日本語の「のに」が「の+に」という分析から期待される意味から離れていることに類似している。

REFSING(1986, p.243)はhikeを単独でも譲歩や逆接の意味を表すこともある等位の接続助詞と認定したうえで、副助詞のkaが後続することでそれらの意味が強調されるとしている。しかし筆者が得ている用例からはhikekaは譲歩のみを表すと考えることができる。

- (42) nekon pakno a=kor sapo nin koraci hawki *hikeka*
 どのように まで (私が)持つ 姉 消える ように 言う ～したのに
 a=kor sapo sitoma wa cis a cis a
 (私が)持つ 姉 恐れる ～して 泣く 継続 泣く 継続
 「(少女は)どんなに私の姉が優しく言っても恐れて泣いていた」

4.5.2. **yakka** 「～しても、～したのに」

上と同じく、前件が実現するにも関わらず後件が実現することを表す。前件はすでに実現している場合(例文43)と未実現の場合(例文44)とがある。用例はあわせて400ほど得られている。

REFSING(1986, p.254)の記述は本稿の記述と基本的に一致している。

- (43) rewsī cis=an *yakka* a=kor oper iperusuy hawē ka isam
 夜通し 泣く(私達が) ～したのに(私が)持つ 嬢ちゃんは 空腹だ 声 も ない
 「夜通し私たちは泣いていたのに嬢ちゃんはお腹の空いた声もあげなかった」
- (44) eci=pokor *yakka* nep eci=eikoytupa ka somo ki
 (お前達が)子供を持つ ～しても 何 (お前達が)欲しがるとも 否定 する
 「お前達は子供が生まれても何不自由しない」

4.6. 前件が後件の理由などであることを表すもの

4.6.1. **kusu, kus** 「～するから」

前件はすでに実現しているか習慣的なことがらであり、それが後件の理由の一つであることを表す。4.2.1.で述べた目的を表すものと異なり、例文45のように前文が複文になることなどもある。なおここでは「人と楽しく話したい希望を持っていること」はすでに実現している事態である。例文46のように接続助詞waの後文の文頭に立つこともあり、4.2.1.で述べたとおり本来は後置副詞だと考えられる。

- (45) ney ta ka aynu oka yakun aynuenewsarrusuy=an *kus* payeka=an
 どこ にも 人間 いる ～したら 人と楽しく話したい(私が) ～するので 歩き回る(私が)

ruwe ne

ようす だ

「どこかに人がいたら楽しく話をしたくて私は歩き回った」

- (46) aynu utar cep e katu wen wa kusu cepcupu=an
 人間 たち 魚 ～を食べる ようす 悪い ～して ～のために 魚を隠す(私が)
 「人間たちの魚の食べかたが悪くて、それで私は魚を隠した」

また後文が主語または人称接辞を伴った「言う・思う」という動詞である例も少なくなく、その場合には前文と後文の動作者は必ず同一である。この表現では、前文の実現する／したことを動作者が強調しているか、あるいは前文を動作者が意志的に実現しようとしているという意味合いを込めて、前文を引用する役割を持つ。用例は50ほど得られている。

- (47) a=kor sapo tutko pakno sini ranke ekimne kus soyene kus ye
 (私が)持つ 姉 二日 位 休む ～しては 山猟をする ～ために 外に出る と 言う
 kane soyene wa iwam
 ～しながら 外に出る ～して しない
 「私の姉は二日くらい休んでは、山猟をしに外出すると言いながら外出してしまう」

4.6.2. kunine, kuni 「～するように」

前件が実現するための手段として後件が起ることを表す。後件は多くの場合話し手が聞き手が主体的に関与できることがらである。kuniは多くの場合「～となること」という意味の名詞化助詞であるが、資料中では6例ほどkunineと同じような用法のものがみられた。kunineの用例も40に満たない。このkunineについての記述はREFSING(1986, p.252)と一致している。

- (48) wenkamuy soyene eaykap kunine hat punkar ari puyar ka
 悪者 外に出る できない ように ブドウ つる を用いて 窓 用いて
 a=toykosinasina
 (私が)しっかり縛る
 「悪者が外に出られないように私はブドウづるで窓もしっかり縛りつけた」

4.7. いわゆる逆接を表すもの

4.7.1. korka 「～するけれど」

前件と後件が表面的に食い違っていることを表す。4.5.で述べたものがいわゆる「譲歩」であるのとは異なっている。すなわち下の例文の「私が死んでも村は滅びもしない」ことは「お前が負けたら村が滅びる」ことと異なる事態の実現が期待されて述べられているのではない。この記述はREFSING(1986, p.258)と基本的に矛盾しない。

- (49) anani anak menoko an=ne ray=an yakka kotan ewen ka
私 は 女 (私が)である 死ぬ(私が) ~しても 村 それで滅びる も
somo ki korka e=wenno yak'un kotan ewen na
否定 する ~するけれど (お前が)負ける ~したら 村 それで滅びる よ
「女である私が死んでも村は滅びもしないけれど、お前が負けたら村が滅びるよ」

おわりに

本稿をまとめるにあたって貴重な示唆をいただいた千葉大学の中川裕助教授と北海道立アイヌ民族文化研究センターの大谷洋一研究員にこの場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

- REFSING, Kirsten(1986): *The Ainu Language*, Aarhus University Press.
- 浅井 亨(1969): 「アイヌ語の文法 —アイヌ語石狩方言文法の概略—」、アイヌ文化保存対策協議会(編)『アイヌ民族誌』、第一法規出版、pp.771-800.
- 古原 敏弘(1991): 「織田ステノの伝承(I)」、静内町教育委員会(編)『静内地方の伝承(I)—織田ステノの口承文芸(1)—』、pp.1-4.
- (1992): 「織田ステノの伝承(II)」、静内町教育委員会(編)『静内地方の伝承(II)—織田ステノの口承文芸(2)—』、pp.1-4.
- 静内町教育委員会(編)(1991): 『静内地方の伝承(I)—織田ステノの口承文芸(1)—』.
- (1992): 『静内地方の伝承(II)—織田ステノの口承文芸(2)—』.
- (1993): 『静内地方の伝承(III)—織田ステノの口承文芸(3)—』.
- (1994): 『静内地方の伝承(IV)—織田ステノの口承文芸(4)—』.
- (1995): 『静内地方の伝承(V)—織田ステノの口承文芸(5)—』.
- 田村(福田)すず子(1960): 「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」、『民族学研究』24/4: 67-78.
- (1961): 「アイヌ語沙流方言の副助詞と終助詞—アイヌ語の助詞についての報告その2—」、『言語研究』39: 21-38.
- 田村すず子(1972): 「アイヌ語沙流方言における《…して…》の表現」、『国学院雑誌』73/11: 147-163.
- (1973a): 「アイヌ語沙流方言におけるcikiの用法」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』、11: 28-45.
- (1973b): 「アイヌ語沙流方言におけるyak, yakneの用法」、*ILT NEWS*, 49・50: 61-74.
- (1988): 「アイヌ語」(項目)、『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 上』三省堂、pp.6-94.
- 知里真志保(1942): 『アイヌ語法研究 —樺太方言を中心として—』、『樺太庁博物館報告』4/4(参照ページ数は『知里真志保著作集 3』所収のものによる).
- (1953): 「アイヌ語の助詞」、金田一博士古稀記念論文集刊行会(編)『金田一京助博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂、pp.913-932.

中川 裕(1982a)：「アスペクト的観点からみたアイヌ語の動詞」、「北方言語・文化研究会成果報告(8)」所収、『早稲田大学語学教育研究所紀要』24：95-101.

———(1982b)：「アイヌ語の助詞unについての一考察」、『言語学演習'82』：90-100.

益岡 隆志(1993)：「条件表現と文の概念レベル」、益岡(編)『日本語の条件表現』くろしお出版、pp.23-39.

南 不二男(1974)：『現代日本語の構造』、大修館書店.

Conjunctionalizers in the Shizunai dialect of Ainu

OKUDA Osami

Summary

In this article the author describes the meaning of each conjunctionalizer in the Shizunai dialect of Ainu, discussing the syntactic function of conjunctionalizers in Ainu as a whole. While REFSING (1986) has already presented a complete description of the same dialect including the conjunctionalizers, the present author attempts to modify and supplement this work according to the results of his own research. Although conjunctionalizers in some other dialects of the Ainu have also been investigated and described, the syntactic function of the conjunctionalizers as a whole is still controversial.

The present research is based mainly on an analysis of folklore texts narrated by Ms. Orita, an Ainu lady who lived in Shizunai district from 1901 to 1993. Amounting to 110,000 tokens, these were recorded on tapes by the Shizunai Board of Education and were transcribed and translated into Japanese by the author. The greater part of the texts have already been published by the Board (1991-1995).

The author defines Ainu conjunctionalizers in the following way : bound forms which follow verbal sentences or verb phrases to form adverbial clauses or phrases. In contrast to REFSING (1986) the author insists that conjunctions do not exist as free forms in this dialect. He also attempts to clarify the relationship between conjunctionalizers and sentence final particles.

The author also presents a preliminary analysis of the hierarchy of conjunctionalizers in Ainu from the viewpoint of syntactic-semantic complexity. The analysis subdivides the conjunctionalizers of the dialect into the following classes and describes the meaning of each : temporal, purposive or the way of doing, evidential, conditional, concessive, consequential and adversative.

Key Words : Ainu language, conjunctionalizer, subordinate clause